

ハツハツハ……

(步)
(音)

むわっと熱気の籠る田舎の夜の森の中、一人でキャンプに来て迷ってしまった“あなた”が街道を探し彷徨っている。

重く歩みを鈍くさせている足を一步一歩と踏み出しが、周囲からは虫や鳥の……何より大型の歓のモノの、声が聞こえてきて“あなた”的精神を自ら咎める。

だからこそ小さく喘ぐような息を繰り返しながら、“あなた”はがむしやらにただただ機械でもなつたように棒になつた足を振り回し、歩みを続けていた)

《コツツ……》

森の中。

寂れた廃寺のような場所の前で“あなた”的発する音を聞き取り足を止める和装の少女が一人。その頭には髪の毛と同じく銀色の獣のような耳と、その和装の下からは同じ色のふわりと大きく広がつた尾っぽが顔を覗かせている。

?

ハツハツハ……

《毛氏詩傳》卷之二

夕食の材料にでもしようとしていたのか、載せた食材ごとザルを床へと置き、周囲に視線を配る。近付いてくる音に、少女が訝しげな顔を見せた。

— ?
— ?
— ?

もやアヤカシ狩りの検非違使(けびいし)の類か?
いや……それこそまさか。今の世に、人を害する程の力を持つたものなどそうおるまいし。
もしそうであるならば、ワシの所になぞ尚の事来るはずが……」

《ガサツ……！！》

（草むらが搔き分けられる音）

？？？

「くやんつ！？」

なつ、まさか本当に人……かの？

どうやつてここに、というか……そんなボロボロの姿はどうした？！
ワシを害しに来たという訳でもなさそうじやし……一体何用じや？」

突然草むらから顔を覗かせた“あなた”に少女が驚いた顔を見せる。
だが息も絶え絶えといった様子の“あなた”にすぐに戸惑いの色を見せ少女は問いかけるが、
“あなた”は歩き疲れフラつく足をしながらも……その少女の頭と尾にある人ならざる部位を見
て、目を丸くし……一步、後ずさつてしまう。

《……ジリ》
(後ずさる音)

？？？

「なつ……お主、何故後ずさる？

そんな体でまた森の中を彷徨おうものなら、それこそ獣の餌になるぞ！
んつ……なんじや、お主のその目は？ ワシの頭に、何か付いて……あつ」

少女が“あなた”的目線に何か気付いたように手を頭にやる。

そして自身の銀色の耳に触れると、やつてしまつたといった様子で顔を歪めた。

“あなた”はそれを見て、ガクガクと震える足で元の道を戻ろうとするが、それは産まれ立ての
小鹿のものよりも頼りない足取りであり、遅々として前に進まない。

？？？

「ああ、これつ！ お主、待たんか！？ そんな体で無理に歩こうとするでない！
ええい……こんな所で人に出会うなどと思うておらんかったから、人化の術をかけ忘れておつた
かつ！」

うう……む、見てみぬフリでもすべきか？ じやが……流石に、このままの野垂れ死ぬか獣の餌に
なるのを見過ごすのは……うう、……ええい！！」

逃げようとする“あなた”的様子に、少女は悩むように唸り声をあげたが。
頭を振り意を決めると、近くに落ちていた木の葉を一枚拾い上げ、中指と人指し指の間に挟み
口元へと近付ける。

？？？

「くう……おんつ！」

《ぼつ……！》
(青白い炎が“あなた”的前に現れる音)

《どさ……》
(炎を見た“あなた”が地面へと倒れる音)

小さく鋭い叫び声をあげたかと思うと、“あなた”的前に青白い火球が突如現れる。
その炎を見た瞬間、急に辛うじていでいた意識が揺さぶられ、そのまま崩れるように“あなた”

は倒れこんでしまう。

？？？

「ふう……まだ人にこの程度の術が効くぐらいには力は残つてくれておつたか。
……頭などを変な場所に打ち付けてはおらんじやろうな？」

《ぞいぞいぞい……》

(“あなた”に近付く音)

《す……》

(倒れた“あなた”に触れ、傷がないか確かめる音)

？？？

「ふむ……大丈夫そう、じやな？
良かつた……許せよ。

ワシの不注意もあつたが、今のお主をそのまま放り出してしまう方が危なかつたのじや。
介抱はさせて貰うから、それを侘びとさせておくれ……。
んつ……しょつと！」

少女は意識を失つた“あなた”に、申し訳なさそうに声を掛け、腕の間に頭を入れる。
そしてそのまま廃寺の中へと、“あなた”を支えるようにして入つていくのであつた。